

 鹿児島県第2区 自民党 衆議院議員 徳田毅さんよりのご紹介で
人生は捨てたものじゃないと思える話を掲載いたします。

『心に残るとっておきの話・普及版第十二集』潮文社より



— おっちゃん — 鈴木 正一 大分市 昭和26年生まれ

昭和37年。私が小学校4年生頃のことである。
父が友人の保証をしたのがきっかけで事業に失敗して、少なからぬ借金を抱えた。
それで親子6人、古い借家へ引っ越した。それは逃げたのではなく、今までの家も土地も借金のかたに取られたため、住んでいられなくなり、ほかの債権者に理由を言っで移ったのであった。
それでも借金取りはいくらでも回収しようと毎日のように取り立てに来ていた。
とうとう父も万策尽き果て、少しでも返済しなければと色々な働き口を探して歩いていたようだが、何しろ借金の断わりやら詫びやら、また少しでも給料の多いところをよそで選んでいたのが就職がおくれ、数カ月間仕事も出来ない状態で朝早くから夜遅くまで走り回っていたように思う。その間、母は遠方の親類から米や乾物を送ってもらい、私達4人の子を細々と食べさせていたのである。

そんなある日の朝、やはり一人の借金取りが来た。
初めて見る顔で、父より少し若い感じのする男だったが、家の戸を思い切り開けるなり、「鈴木はおるか。鈴木は!!」と大きな声でどなった。
母はびっくりして、「すみません。主人は今、仕事を探しに出かけて留守なんです」と言うと、「ウソをつけ、ほんまは奥におるんとちゃうんか」と言いながら、私達が玄関に脱いだ靴の方を見たり、奥の方をのぞいたりしては、「留守やったらしようないなあ、買った50万と利息を貰いに来たんやけど、ほんなら奥さん、あんた、なんぼでもええから返して貰おうか」とぞんぞん言う。

母は、「本当に迷惑かけてすみません。いくらでもあればお渡しますが本当にないんです。お米を買うお金もなく、この子らも、きのうからご飯も食べてないんです」と泣きながら言っていたのをはっきり覚えている。
あの頃は毎日毎日が本当に空腹であった。私は大変恐ろしかったが、小さいながらも母の陰に隠れて、その人をじっとにらんでいたように思う。
その人もチラチラと私の方を見ていたが、急に、「ほんなら、また来るわ」と案外あっさりとして、今度は静かに戸を閉めて帰って行った。

その日の夕方のことである。
表の電柱の所に朝来たその人が立っていた。その人は私を見ると手招きして、「ボクちょっとおいで」と言う。私が恐る恐る近づいて行くと、「今朝は大きな声を出してごめん、おかあちゃんを泣かしてしまって」と、私の頭をなでながら、「おっちゃん、今朝のこと、あやまりに来たんやけど、また行って、おかあちゃん、びっくりしたらあかんから、これ家に持って帰ったり」と言って大きな紙の袋に入った米を持たせてくれた。
そして、その米の袋の中にパンを2つ入れてくれて、「ボクお腹すいたやろ、はよ持って帰って、おかあちゃんと一緒に食べ。おっちゃんは、もう二度とけえへんから心配せえへんように言うていてや。おっちゃんの仕事、はよ見付かったらええのになあ。ほんならバイバイ」と言って帰って行った。

私は何か、こう怖いような、うれいような、とくにかびっくりして、その重たい袋を家に持って入っていった。母は私を見るなり、「なんやそれ?」と言って、私の話を聞くなり、すぐ表に飛び出したが、もう、そのおっちゃんはいなかった。
母は表に向かって長い間、手を合わせていた。私も物を貰ったからではなく、そのおっちゃんの言葉や母の今の態度から見て、あのおっちゃんは、朝は怖かったけれど本当はやさしい、ええおっちゃんなんやと思うようになっていた。

その時のパンのおいしかったこと、また、その日の晩、おかずこそ何もなかったけれど親子6人、久しぶりにお腹一杯、おにぎりを食べたあの味は今も忘れられない、今でもおにぎりを見ると、あの頃のことを思い出す。

それから数カ月。
父の就職もやっと決まり給料を貰うようになり、母も働くようになり、やっとなんか出た、残りももちろん借金払いにまわしてと、そんな日々が続くようになった頃、ちょうど、あのおっちゃんがお米とパンを恵んでくれた日から半年ほど後の頃だろうか。父がいくばくかのお金を封筒に入れてながら母に、「利息にもなれへんけれど次は木下さんの所へ行って」と言っている。木下さんとは、あのおっちゃんのことである。
長い時間が過ぎた後、両親そろって帰ってきた。が、あのおっちゃんはまだ前の所にはいないという。近所の人にも聞き、役所まで調べに行ったら「分からなかったらしい。だが、それから本当に、あのおっちゃんは二度と来なかった。50万円といえども大金であるが、当時の値打ちは今の何百万円に相当するだろうか。

父が事業に失敗して以来10何年、両親とも休むことなく、こつこつ働いて私達4人の子供を大きくしてくれた。
他の借金も全部払い、小さいながらもまた商売をはじめ、自分の家も持つまでになった。今は私達4人の子供も皆、自立している。やっとお金にも心にも体にもゆとりが出来てきた頃、父は他界した。ちょうど10年前である。

私が成人する頃にふと気が付いたことなのであるが、いつ見ても仏壇の中に百万円の束がひとつ入れている。母に聞くと、木下さんに、いつどこで逢っても、借りた50万円と利息分50万円を返せるよとのことなのだ。百万円位ではもちろん全然足りないのだけれど、とりあえずそうしているとのことであった。

その父が亡くなる2年ほど前のことであるが、久しぶりに父と一緒に近くの銭湯に行った。そこでの出来事である。
5人ほどの日焼けした、たくましい体の男達の端っこで一人の老人が体を洗っていた。老人といってもやはり体はたくましかった。父と同年輩くらいだろうか、両肩に入れ墨を入れてはいるが年がいつているせいか、かなりかすんだ入れ墨である。若い時はさぞかし、きれいなものであつたらう。入れ墨を入れているのでやはり人目を引くのか、父もその老人を見ていた。
父はずっと見ていたので、私は、ほかの若い男達もいることだし、何か因縁でもつけられては大変と思い、父の腕をそつついて、見るというふうにながめた。父は見ていた。
すると父は急に何を思ったのか、まだ体も洗っていないのに脱衣場まで出て体を拭き始めた。私も何事かと父の後を追ひ、「なんやねんな、おっちゃん、まだ入ったばかりやのに」と言うとうちは、「間違ひあらへん、木下さんや、あの入れ墨の人」と言い、私に、「お前、すぐ家に帰って、あの仏壇の百万円を持って来い」と言う。「わしはここで待っているからすぐ行け」と急ぎ立てた。

そのふる屋から自宅までゆっくり歩いて2、3分の距離であったが、私も思いっきり走って、すぐ、ふる屋まで戻ってきた。もちろん百万円を持ってである。
父は私の顔を見ると、安心したような緊張したような顔をして、「表で待ってよか」と言って、さっさと出ていった。番台のおばちゃんも上げんな顔をしていた。表で待っていると間もなく母も小走りで駆けつけてきた。ひとこと、お礼を言いたかったのであろう。
しばらくして若い男達と一緒に老人が出てきた。皆、作業着を着た土方姿であるが、ふるあがりなのさっぱりしたきれいな顔である。

父はすぐ老人の所へ行き、「木下さんお久しぶりです、鈴木です。お宅にお世話になって長いこと迷惑をかけていた鈴木です。覚えていやはりますやろ」と言って、皆より少し離れたところへ行き、「本当に長いことすみませんでした。あの時、借りた50万円と、利息には足りませんが、もう50万円の百万円お返ししますので、どうか受け取って下さい」と言うと、老人はやっと思ひ出したようで、「ああ鈴木はんかいな、ほんまに久しぶりやなあ、せやけど、そんな大昔のこと、もう忘れてしまつたし、第一、時効やがなあ、ははは、せやからその金、しもうとき」と言って受け取らなかった。

母もそばに来て、「木下さん、あの時は本当にありがとうございました。あの時貰ったお米で、どれだけ助かったか分かりませんが、この子もすごく喜んで、『おっちゃんか、おっちゃんか』と言って帰ってきました。どうか受け取って下さい」と言っている。
私も「おっちゃん」と喉まで出かかった言葉をかみこらし、「あの時のパンとお米、本当にありがとうございました。今でもあの時のおいしかったことを忘れはしません」と礼を言った。

そばで見ると、なるほど年老いてはいるが、まさにあの時のおっちゃんの顔だ。すると木下さんは、「ほうかいな、あの時のほんが、こんなになってえ」と嬉しそうな顔をしてくれた。
私も33歳になっていた。父と木下さんはいろいろやりとりをしていたが、木下さんは頑として受け取らない。話の内容は、今このような土方仕事をしているが別に金に困ってのことではない。こう見えても、あの夫婦の親方であること、他にもまだ10数人の働き手がいて、ちょっとした土建会社の社長であること。今日は近くの現場の仕事が終わったので、皆を連れて一杯飲みに行くところだったとのことである。

結局、父がいくら言っても木下さんがその金を受け取ろうとしないので、母も最後にはさすがのように、「お願いですから受け取って下さい」と、ついに泣いてしまった。
すると木下さんは、「しゃあないなあ、奥さんもよう泣くお人や、よっしゃ分かった、ほな、こないよう、この金は一旦返して貰うわ、ほんで鈴木はん、あんた、また商売始めてるそうやとさかい、その祝いや、ほんのわしの気持ちやから受け取ってんか」と言って、無理やり父のポケットにつっこんだ。
そして、「それやったら鈴木はんも納得いかんやろから、これから、うちの奴ら連れて飲みに行つて、めし食わすんやけど、それを鈴木はんのおごりでたのむわ。奥さんも、にいちゃんも一緒にどないや、あいつらはちょっとやかましけれど、皆ええ奴やから」と言う。

父も母もついに負けてしまった。異存のあるはずがない。

それ以来、木下さんととは年に4、5回行ったり来たりにつきあいである。そして、それは父のいない今も続いている。



新撰組同志会

SHINSENGUMI DOSHIKAI NEWS No.11

新撰組同志会 ニュース 第11号
2010年11月18日発行
新撰組同志会
会長 盛孝光
顧問 緑健児
実行委員長 満留直行
事務局長 宮上郁代
LA新撰組局長 重田光康
〒101-0052
東京都千代田区神田小川町3-28-13
ライネお茶の水1101
TEL.03-3294-7480 FAX.03-3294-7488



太鼓奏者
上田 秀一郎

響
魂

【ごじぎょんごらうごん】
その一打に力の全てを注ぎ込む。
“Every beat with all one's heart”

松浦純三さんが8月にご結婚されました。
新撰組のOBで現在、
本田レストラン(寿司)を
経営しています。



松浦純三夫妻

前号でご紹介しました新撰組OBで
「FOOD BAR 人人(ひと)」の
深川年男さんがご結婚されました。



深川年男夫妻

丸武産業の田之上社長の
息子さんの田之上智隆さんが
ご結婚されました。



田之上智隆夫妻

大田真也・昌代さんが
ご結婚されました。



大田真也さん 昌代さん

祝
結婚!!
祝
誕生!!

並木裕祐・裕衣夫妻に
お子さんが生まれました。
ひゅうまくん



福本剛敏さんからのご紹介で
福本新ファミリーを
ご紹介いたします。



福本新平さん
おうたろう 旺太郎くん 5ヶ月
かな 菜南ちゃん 2才

盛孝光会長から同志会の方々に知らせたい “深い言葉” 箱根山 駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人 中村天風 多くの人が関わり合い助け合いながら、世の中は成り立っているということ。